



仙台・宮城元気ニュース

～仙台地域の元気な情報を掲載！～

Vol. 6

平成 23 年 7 月 13 日

【発行】

宮城県仙台地方振興事務所

松島の酒店「むとう屋」営業を再開！

～多くの人に支えられて、今のむとう屋がある～

松島町の酒類専門店“むとう屋”。地震の当日、海岸通りに位置する同店に押し寄せた津波は室内でも1.5メートルに及び、津波が引いた後に残されたのは大量のヘドロでした。部屋が丸一つ分覆いつくされるほどのヘドロを断水により水が満足以使えない状態で清掃するのは難しく、また、商品である酒瓶の殆どが壊れ散乱する光景は、やる気も失うような悲惨なものだったといいます。



そのような状況で、店の名前にかけて目標としていた6月10日に営業を再開することができたのは、蔵元や取引先等の手厚い支援のおかげでした。

特に、専務取締役である佐々木憲作さんが「復興の原点である」と断言したのは、塩竈市の阿部勘酒造店の支援でした。同店では、震災直後から1週間以上もの間、毎日3tの井戸水を届け、5～6人体制でヘドロのかき出しを手伝いました。また、懇意にしている静岡県のお客さんが届けてくれた50kg以上の重曹は、ヘドロの臭いを消すのに大いに役立ちました。さらに、地元業者の協力がなければ、壁の張替え等の補修作業を期日に間に合わせることはできなかったといいます。

「蔵元さんや、取引のある方々の助けがあったから今のむとう屋がある」そう語る佐々木さんは、「今後は、お客様に対してはもちろん、取引のある方々に恩返しをしながら、宮城の酒の名前を全国に広めていきたい。そして、“優しさ”を第一に考えた接遇をしていきたい」と笑顔で抱負を話してくださいました。

伝統の食文化を守るために！

～宮城県産米で作るずんだ餅を届けます～

仙台市若林区にある“黄金食品”では、宮城県でお盆やお彼岸に食べられる伝統食“ずんだ餅”の製造販売を行っています。

震災直後は、停電により冷凍庫が停止。冷



凍保存していた餅を食料が不足していた避難所に提供しました。また、震災から10日後にライフラインは復旧しましたが、機械の検査や材料の調達のため、工場を再開することができたのは3月の下旬でした。

しかし、山元町にある専属農場“黄金ファーム”は津波の浸水を受け、現在、作付けの見通しは立っていません。そのため、黄金ファームで生産された餅米を使った餅の製造は秋で終了となりますが、宮城県産の餅米にこだわり、秋以降は加美町の餅米を使うこととしています。

代表取締役の庄子康弘さんは「伝統の食文化を守り、宮城県産米と昔ながらの製法で作ったおいしい“ずんだ餅”を多くのお客様にお届けすることで宮城県を元気にし、また宮城県の復興を全国にアピールしていきたい」と目標を話してくださいました。

山元町の災害臨時FM「りんごラジオ」

～常設のラジオ局として放送を継続したい～

震災後の3月21日に、山元町の災害臨時FM“りんごラジオ”が開局しました。局の要である高橋厚さんは元東北放送アナウンサーであり、定年後は自給自足をしながら里山で生活したいとの想いから、8年前に山元町に移住しました。



震災の直後、停電と回線の混乱により電話連絡もままならない中、山元町の現状を外部に知らせることは困難でした。仙台にあるラジオ局各社は、「山元町と連絡が取れないこと」を放送し、次第に「なぜ山元町の情報が流されないのか」、「本当に壊滅してしまったのではないのか」という声が出始めました。そのような状況で、高橋さんの呼びかけにより、りんごラジオの開局が決定したのは、震災から4日後のことでした。

全く白紙からのスタートでしたが、高橋さんのアナウンサーとしての経験が活かされました。現在は、ボランティアのスタッフに支えられながら、毎日午前8時から午後5時までの1時間ごとに、生活関連情報や被災者の体験談などを発信しています。

「(町民は)今まで情報を受けるだけで発信するのに、慣れていなかった。ボランティアの人や学校の先生など色々な人にゲストとして来てもらって、情報を出していけるようにしたい。そうして、町民の皆で情報を共有していきたい」と、高橋さんはラジオ放送への想

いを話してくださいました。

りんごラジオは7月から役場駐車場に建設されている仮庁舎に移転し、今後も常設のラジオ局として活動を継続する予定です。

順調に進む！ 被災排水機場の応急復旧

地震に伴う津波の影響により、仙台管内の排水機場は壊滅的な被害を受けました。特に仙台市以南の20の排水機場は、すべて運転不可能となり、不明者の捜索や瓦礫の撤去、道路や宅地などの復旧業務に必要な排水は、仮設の応急ポンプで対応してきました。しかし、降雨時には湛水被害の拡大が懸念されるなど、地域の皆さんの生活の不安を解消することは出来ませんでした。



このため、効率的かつ早急に排水機場の再稼働が出来るよう、当所農業農村整備部は県が造成した排水機場を、東北農政局は国が造成した排水機場の応急復旧

を行うよう分担し、工事を進めてきました。

梅雨入りを控えた5月30日から、亘理町の荒浜第2排水機場を皮切りに、現在まで12の排水機場において、ポンプの一部稼働が可能となっています。また、各排水機場の管理を行っている土地改良区の職員の熟練した運転操作もあり、ある程度の降雨には対応できるようになりました。

今後は、農地の復旧に向けた除塩作業による水田への導水が円滑に行えるように、また、秋雨前線や台風による湛水被害を最小限に押さえることができるように、引き続き排水機場の復旧に努めます。

森林の恵みで雇用を創出

～新規参入者と失業者の就労支援に東奔西走～

七ッ森の麓、あの日の地震が嘘のように、静寂に包まれ、また緑豊かな自然に囲まれた倉庫兼事務所の一角で、元気な声がこだまします。

ここは、農事組合法人七ッ森菌床椎茸生産組合の事業所です。とりわけ元気なのは、一見豪放磊落に見えながらも、従業員に心底優しく接する組合長の早坂誠吉さんです。早坂



さんは、これまで地元で行われてきた原木シイタケ栽培について、生産の不安定さや重労働、労働力の高齢化など、様々な課題があったことから、労働条件の改善と周年栽培による収入の安定化を図るため、平成13年に組合を立ち上げました。組合の活動を通して、

菌床栽培によるシイタケの新たな産地形成を目指しています。

現在は、大和町や地元農協との連携も強化され、安定した収量を維持し、毎年100tのシイタケを仙台や横浜等へ出荷しています。

震災による停電により、一時は菌床培養施設の維持管理が危ぶまれましたが、それを乗り越え、操業の再開に至りました。産地形成に不可欠な後継者(新規参入者)の確保や、失業者の雇用の場として門戸を広げるなど、早坂さんの前向きな経営姿勢には頭が下がる思いです。

名取市北釜地区の被災農業者が“小松菜”栽培を再開！

名取市北釜地区は、名取市東部の沿岸地区に位置し、古くから砂質土壌の条件を活かしたメロン等の野菜生産が盛んな地域でした。近年は小松菜及びチンゲンサイの県内最大の産地でもありました。

しかし、地震に伴う津波により、当地区の家屋や農地は全て流され壊滅的な被害を受けました。多くの被災農業者は避難生活を余儀なくされていますが、何とか営農を再開したいという思いは強く、再開に向け動き出した農業者もいます。

北釜地区の3戸の農家により結成された“北釜耕人会”は、名取市内の遊休未利用農地を借り受け、小松菜の栽培を開始しました。

遊休未利用農地であるため畑は荒れ果てていましたが、重機などを借りながら懸命に農地の復元を行い、5月5日には播種にこぎ着けました。これまでとは違う土地での栽培に苦労もありましたが、好天にも恵まれ、順調に生育しました。6月8日には初収穫を迎え、この日30ケースが仙台市場に出荷されました。

その後、更に農地を拡大し、現在は1.5haとなっています。また、露地栽培のため雨が降ると播種ができないことや、湿害等により生育が不安定であるなど、現状では課題も多いため、国の補助事業等を活用しながらパイプハウスの導入も計画しています。まだまだ険しい道のりですが、北釜耕人会の皆さんは復興に向け一歩ずつ歩み始めました。



★ 仙台・宮城元気ニュースは、宮城県の復興を目指す皆さんに少しでも元気になっていただけるよう、仙台地域の明るい話題や元気な人の情報を発信していきます。

お問い合わせ先

宮城県仙台地方振興事務所

地方振興部(担当:鈴木,高橋)

(HP) <http://www.pref.miyagi.jp/sdsgsin/>

(E-Mail) sdsinbk2@pref.miyagi.jp

(TEL) 022-275-9140

